2010FIFA南アフリカワールドカップ報告

松田　保[1)]

A report of 2010 FIFA World Cup South Africa

Tamotsu MATSUDA

Key words：スポーツ，アートサッカー，アフリカ，JICA

1．はじめに

人類発祥の地・発展途上国53ヵ国のアフリカ大陸で“It's possible.”のスローガンのもと，南アフリカW杯が開催された。南アフリカ共和国の反アパルトヘイトの政治犯強制収容所であったロベン島から始まった囚人たちのサッカーリーグとサッカー協会の設立が，獄中生活の唯一の人間的行為として，自由と公平を訴える大きな力を育て，やがてアパルトヘイトを廃止させ南アフリカの民主化を勝ち取った。27年間獄中生活を送ったネルソン・マンデラが全人種参加選挙後初代大統領兼スポーツ大臣となり，民主国家への道を切り開きながら「インビクタス」の映画でも有名になった1995年第３回ラクビーW-CUPを開催し，自国の奇跡の初優勝とスポーツを通しての人種の融和を推進した。2005年スイス・チューリッヒワールドカップ招致演説で「南アを変え，アフリカを変え，人々の世界観を変える大会にしたい」と熱く訴え，モロッコを破り招致を勝ち取った。３代目のジェイコブ・ズマ現大統領はロベン島９チームの一つのキャプテンであり，審判員・協会役員としても活躍したサッカーマンである。

多くの黒人ボランティアが運営する初めてのアフリカ大陸での開催は，多くの不安を抱えたが，国民の80％である黒人のスポーツ・サッカーへの愛情が，大会を予想外に安全でスムーズに導き，我らが大会であることを強く印象つけた。

優勝候補NO１のスペインが悲願の初優勝を果たした。「ゴールは銀，アートサッカーは金」という芸術の街バルサのサッカーファンとカンプノウの舞台が，歴史を積み重ねて築き上げた華麗なパスワークのファンタジーサッカーでユーロ杯制覇に続き世界チャンピオンとなった。分析され警戒されグループリーグ初戦でスイスに手痛い敗戦を喫しようが，何らスタイルを変えることなくボールを支配し，素早い攻守の切り替えで試合の主導権を握り，名実ともにバルサスタイルのアートサッカーが世界のトレンドであることを全世界に示した。

優勝候補の一角であったイングランド・イタリア・フランスの不振とホームとして期待を集めていた近年飛躍的に台頭してきたアフリカ勢の早期敗退は予想外であった。大会直前までクラブチームで活躍している選手を集めての代表チームのマネージメントは大変困難を極め，更にスター選手をまとめることの難しさはドイツ大会の日本と同じ状況だったといえる。サッカー強国の宿命でもあるが，予選リーグで調整し，チーム作りを進めて，決勝トーナメントには100％に持って行き上位を狙うという考えでは通用しなくなっているということだ。世界はどんどんトップとの差を縮めている。サッカー後進国と言われているニュージーランドが予選リーグ３分け無敗で大会を去ったが，どの国が出場しても勝つチャンスがあるということだ，それほどサッカー界はグローバル化し，勝つためのあらゆる情報が手に入る。それは日本国内でも同じことが言える。10年スパンくらいの地域での一貫指導が成功すれば，何処の地域でも日本一になれるチャンスがあるということだ。

2．日本代表チームの活躍

４回連続出場権を勝ち取った日本は，独大会とは反対に大会前のトレーニングマッチ４連敗と絶不調で現地に入った。この現実は，

1）競技スポーツ学科

同じEグループでFIFAランキング上位のカメルーン・オランダ・デンマークを大いに油断させ，岡田監督を開き直らせ，そして選手達の結束力とトレランス（耐性）を高めさせた。初戦「不屈のライオン」といわれる世界の強豪カメルーンのエースストライカー・エトーをサムライジャパンの象徴長友が「眠れる獅子」にし，日本はグループリーグを勝ち抜くために最も重要な初戦の１勝を掴み取った。若く伸び盛りで気性の激しいGK川島の抜擢，センターバックの弱点をカバーするための阿部のアンカーボランチでの起用，ヨーロッパで大活躍しだした得点力のある本田のワントップという岡田采配が大ヒット。世界の強豪相手に我慢強く粘り強く走る守備的サッカーがはまり，敵の高い攻撃力を封じた。世界ランク２位のオランダ戦（０－１）の善戦も自信となり，この最少失点が得失点差においてデンマーク戦に大きなアドバンテージとなり，２－０の後２－１にされても慌てないでゲームをコントロールし試合を決定つける３点目を決め快勝した。大会直前は誰もが３連敗と思っていたチームが捨て身で試合を重ねるごとに進化し，アウエーでは初めての決勝トーナメント進出の快挙を成し遂げた。この勢いで更に進化し，リスクを負ってでもパラグアイ戦を勝ちに行くべきだったが，逆にパラグアイにはめられたような覇気のない消極的なゲームとなり延長も０－０のPK負け。もう一つ勝って世界一のスペインと戦い，本物のトッププロとどこまでやれるのか，その違いを知る絶好のチャンスを失ってしまった。

この成果は４年後のブラジル大会で，さらに高い目標をもって挑戦することを期待されるだろう。しかし世界のトップの育成強化は日々進化している，日本が安閑としていればアジア予選さえ勝てなくなるかも知れない。日本が世界の強豪に追いつくのか，アジアのライバルが日本に追いつくのか，日本のサッカーの真価が問われる４年となるだろう。

レインボーランド（南ア）でブブゼラの喧騒と公式ソング「ワカワカ」の曲にのってスタンドで皆が踊るアフリカならではのW杯を，レインボーカラー（様々な人種の国）の人々と一緒に楽しめた世界観を変える大会となった。

３．「スポーツは世界を救う・アフリカを知りアフリカを救う大会」

FIFAは大会を通してアフリカの現実を知る大会にし，多くの問題を解決する力にしようと呼び掛けた。FIFA ワールドカップで実施した社会貢献プログラム「Dream Goal 2010」，キャッチフレーズは「For the Next Generation」もその一つだ。JICAと連携した「パブリックビューイング・イン・ガーナ」をはじめ，スポーツ・サッカーの持つ力を最大限に生かし，アフリカの未来を支える活動に熱心に取り組んだ。ワールドカップ開催期間中に，現地のJICAスタッフと日本から赴いたソニー社員がキャラバン隊を組み，ガーナ国内15地域，計18会場をまわり，大型映像装置で18試合の映像を生中継で届けた。上映前やハーフタイム時には，HIV・エイズに関する知識を高めるためのクイズ大会や劇を実施。カウンセリングやHIV検診は夜間まで行ったため，数多くの人が受検することができた。

びわこ成蹊スポーツ大学の卒業生も，JICAの一員としてアフリカの大地でスポーツ学士としての使命を持って広い世界観と問題意識，異文化適応力，逞しい精神力，高度なコミュニケーション能力を身に付け，真のグローバル人材となって活動している。

図1　ガーナフラッグを纏ったサポーター

図2　４期生石部元太インエチオピア保健体育の教員として赴任し100名のサッカー部を立ち上げる．